

[037]九州人類学会報表紙奥付等

<https://hdl.handle.net/2324/2344469>

出版情報 : 九州人類学会報. 37, 2010-07-10. Kyushu Anthropological Association
バージョン :
権利関係 :

編集後記

九州人類学研究会は、いまでは、たまたま九州という土地で人類学を学んでいる人々の集まりである。つまり地縁による集合以上のものではない。九州は日本なる国のなかで地理的には周縁に位置するが、だからと言って、受信者の地位に甘んじなければならない必然性など毛頭ない。では、九州が人類学においてインパクトのあるメッセージを発信するパワフルな発信地になるというのは、どういうイメージだろうか？キーワードは、「相互に刺激しあう多様性」ではないかと私は思う。これが何を意味するのか。まず「多様性」ならぬ「同質性」とは、頭目を中心に一派をなして金太郎飴のような研究をつづける路線で、相互に刺激しあうことなど不可能である。「相互に刺激しあわない多様性」というのもある。これは、それぞれが勝手に研究をして、他の人の研究については「お好きにどうぞ」と言っているか、「あんなのは本当の人類学ではない」と軽蔑しているといった風景である。それに対して、「相互に刺激しあう多様性」というのは、それぞれが己の信ずるところに従って実践している人類学が、他の人たちの実践する人類学に対する「応答」となるような関係である。つまり「あの人の研究は、私には関係がない、関心がない」と言うのではなく、「あの人の研究が私の研究に対して投げかけている問題提起は何なのか」について考える作業を自らに課すということである。東京や関西では、夥しい数の人類学者が棲息しているために、それぞれの「仲間うち」がニッチに張り付いて「我が世の春」を謳歌することになりがちである。その点、九州は、さまざまな種の人類学者が（呉越同舟あるいは）ノアの方舟さながらに、九人研という小さな船に乗り合わせている。これは、考えようでは、「相互に刺激しあう多様性」のために有利な環境である。不遜と言われることを覚悟で言えば、おそらく別の意味でも、九人研は「ノアの方舟」たりうる。人類学の未来につながる種子は、ここにある。

九州人類学研究会会長 古谷 嘉章

九州人類学会報 第37号

発行年月日 平成22年7月10日
発行者 古谷 嘉章 (研究会会長)
編集委員会 片山 隆裕 (編集委員長)
飯嶋 秀治・伊藤 泰信・長谷 千代子
森田 真也 (五十音順)
発行所 〒812-8581 福岡市東区箱崎6-19-1
九州大学文学部比較宗教学研究室内
日本文化人類学会九州・沖縄地区研究懇談会
九州人類学研究会
電話:092-642-2424
Email:religion@lit.kyushu-u.ac.jp
印刷所 (有)一正堂
〒812-0053 福岡市東区箱崎6-14-17
電話 092-651-3771